

1. 父である神

使徒信条の全体は3つの部分、「父なる神」、「御子イエス・キリスト」、「聖霊」に分けられます。つまり、三位一体の神様を信じますと告白しています。

聖書において、神は唯一であることが一貫して宣言されています。同時に、父なる神と御子イエス・キリストと聖霊の三者が神であると語られています。神がこのようなあり方をされていることは私たちの理解を超えています。これは神様が教えてくださった真理であって、人が考え出した神についての考えではありません。ですから、私たちが十分に理解できなくても、そして神様が人と違う存在の仕方をしていても、それに驚く必要はありません。唯一の神様は永遠において父、子、聖霊なるお方として存在しておられるのです。

「全能の父である神」について考えます。このことばには「全能の神」と「父である神」という二つのことが言い表されています。「全能の神」という私たちをはるかに超える偉大な神様と、「父なる神」という私たちを愛して親しく関わってくださる神様という、二つのお姿が一つに結び合わされています。その真理と恵みを受け取りたいと思います。

父なる神ということは、神の御子がおられて、御子との関係において「父である神」ということです。父なる神様はイエス様を「わたしの愛する子」と呼び、イエス様は父なる神様を「父よ」と呼んで祈りました。またイエス様は「わたしと父とは一つです」と言われました。それを聞いたユダヤ人がイエスを石打ちにしようとしたことで分かるように、イエス様はご自分が神と同等であると主張なされたのです。

そのような唯一絶対の神様を父と呼び、父なる神様と一つであると言うことができる御父と御子の関係にあるのは主イエス様だけです。

しかし、私たちも神様を「天にいます私たちの父よ」とお呼びして祈ることができます。そのように、主イエス様が私の祈りで教えてくださいました。イエス・キリストを信じる者は神の子どもとされるからです（ヨハネ 1:12）。被造物である私たちが神様の子どもとしていただけること、罪ある私たちが、キリストの贖いによって罪を赦され、神の子どもとされて、神様との交わりを与えられて生きていけることは、なんという特権と幸いでしょうか。そのように私たちが神の子どもとして導いてくださるのは聖霊です。ローマ 8 章 14～16 節。

このように神様の恵みにより、聖霊の導きによって、神の子どもとされることは、いわば養子として神の家族に迎え入れられることです。主イエス様は弟子たちに向かって父なる神様のことを「私たちの父」とは言いませんでしたが、「わたしの父であり、あなたがたの父である方」と言いました。神の御子であるイエス様と同じではありませんが、弟子たちも神の家族の一員となりました。信仰を告白し、救われたすべての人は、主の兄弟、神の子どもなのです。

ですから、使徒信条で「父である神を信じます」と告白する時、神がイエス・キリストの父であり、キリストによって私の父でもあることを告白しているのです。そして、その父である神様は御子イエス様を愛されているように、私をも愛していてくださると告白しているのです。

2. 全能の神

「全能の神」という神様の呼び名は神ご自身がアブラムに語ったものです。アブラムが 99 歳の時に、再び主が彼に現れて語りました。「わたしは全能の神である」。人間にはできないと思われることでも「全能の神」にはできる、神様はそのような権威と力を持つお方であるということです。

その後で、アブラムに新しい名前アブラハムが主によって与えられます。「多くの国民の父」という意味です。この名前に神様の契約が込められていました。主がアブラハムと子孫の神となり、子孫を多くの国民とし、カナンの地を与えるという契約です。主はその契約を「永遠の契約」と言われました。

この「永遠の契約」はどのように実現していくのでしょうか。アブラハムは 100 歳の自分と 90 歳の妻サラから子どもが生まれることはありえないと思っていました。しかし、創世記 17:21。そして、その主のことば通りになったのです。

しかし、「永遠の契約」の成就是アブラハム、イサクの子孫、イスラエルだけではありません。ガラテヤ 3 章 16 節。アブラハムの子孫としてお生れになるイエス・キリストによって「永遠の契約」が成就するのです。つまり、イエス・キリストを信じる者たちもこの契約を結ばれた者となるのです。

このように「全能の神」が「永遠の契約」を立て、どこまでも忠実に守られます。神様が人との間に結ばれた救いの契約を果たすために働かれる力を「全能」というのです。父なる神の全能の力は、御子イエス・キリストによってこの世に表されています。父なる神は、罪人の私たちを救うために、愛する御子を遣わし、十字架の死に向かわせ、よみがえらされました。この神様の全能の力が私たち一人ひとりに働いているゆえに、それぞれが信仰を告白し、罪を赦され、神の子とされ、新しく生かされています。その恵みを証しして、「全能の神を信じます」と告白するのです。

神が全能であることに関していくつか疑問が起こります。その解決を付け加えておきたいと思います。

第一に、神が全能であるとは神におできにならないことはないということでしょうか。そうではありません。神にできないことがあります。神様は、聖であり、愛であり、義であるご自身の性質に反することはできません。しかし、神様のみこころにかなうことは何でもおできになります。詩篇に「主は望むところをことごとく行われる」(135:6)とある通りです。

第二に、神が全能であることと人の自由意志とが相反することはないのでしょうか。その答えは、神様がみこころを行われることは、人の思いや行動によって妨げられることはないということです。神様は人に自由意志を与えました。それゆえに自分の思いとことばと行動について神様に責任を問われると聖書は教えています。同時に、神様がすべてを支配しておられることも聖書は教えています。神様がどのようにして人の自由意志を支え、それを侵すことなく支配されるのかは、神様の領域であり、私たちには隠されているのです。

第三に、神が全能であり、愛であるなら、悪や苦しみを取り除かれるのではないのでしょうか。そうです、神様は悪を取り除こうとしておられます。キリストによって私たち罪人が救われて、聖められつつあります。この世に恵みと神の国が広がるように神様が御業を行っておられます。やがて、キリストが再臨され、新天新地となり、悪が一掃されるのです。その時がまだきていないのは、一人でも多くの方が救われるためです。

3. 全能の神を父と呼ぶ幸い

このような全能の神によって私たちは救われました。そして、全能の神を父とお呼びすることができるのですから、何と幸いなことでしょうか。

Ⅱコリント6:16~18。このことは旧約時代から神様がご自身の民イスラエルに与えていた約束と命令で、同じようにキリスト者たちにも与えられています。その約束は、主がキリスト者の間に住み、ともに歩んでくださること、主が信じる者の神となり、信じる者は主の民とされること、また、神の子どもとされることです。「それゆえ、…彼らから離れよ」と主は命じます。つまり、偶像から離れよということです。

全能の神を信頼しきれないと、他のものに頼ろうとするのではないのでしょうか。神以外のものに頼ろうとする心が偶像礼拝と言えます。そのような時にはみことばにある神の約束に信頼するよりも、自分の判断が優先していて、それは不信仰、不従順の罪でしょう。

しかし、そんな罪深い私たちをも父なる神様は大きな愛をもって導いてくださいます。親が子どもの誕生を喜び、成長を期待し、育てていくように、父なる神様はキリストによって新しく生まれさせてご自身の子どもとされた私たちのことを喜び、私たちの霊的成長を期待し、導いてくださるのです。全能の神様が愛をもって関わり、教え、戒め、矯正し、御前に正しく歩むことができるように助けてくださるのです。全能の神様がおられるので、たとえ自分の罪深さに打ちひしがれても、悔い改めて立ち返ることができます。たとえどんな苦難の中にあっても、自分の人生を投げ出すことなく、歩むことができます。そのような救いを成し遂げてくださる全能の神様を私たちの父である神様とお呼びすることができることを感謝したいと思います。

私たちは「全能の父である神」と信じて告白しています。御父と御子の交わりのように、私たちも神様を父とお呼びすることができます。神様の愛と恵みによって、イエス・キリストの贖いのゆえに、罪赦され、神の子とされて、神様との交わりを持ちつつ生きることができています。

それは全能の神様が永遠の契約を立て、救いを成し遂げてくださるからです。神様の全能の力が私たちにも働いているので、私たちは救われて、成長を導かれ、やがて完成に至るのです。救いを成し遂げてくださる全能の神様を私たちの父である神様とお呼びすることができる幸いを感謝しましょう。